慶應義塾大学日吉キャンパス特色 GP

「文系学生への実験を重視した自然科学教育」

第 2 回シンポジウム
「様々なカリキュラムの可能性」

日時／ 2006 年 11 月 22 日　水曜日　13:00 ～ 17:00
場所／慶應義塾大学来往舎　シンポジウムスペース
主催／日吉キャンパス特色 GP

プログラム

13:00 ～ 13:05　開会、趣旨説明　　下村 裕（司会・法学部教授）

13:05 ～ 13:15　挨拶　　西村太良（教育担当常任理事）

13:10 ～ 13:50　講演「京都大学総合人間学部『副専攻』制度の変遷」
西井正弘（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、総合人間学部教務委員長）

13:50 ～ 14:30　講演「新潟大学の新学士課程教育システムー分野水準表示法と副専攻制度ー」
濱口　哲（新潟大学教授、全学教育機構副機構長、副学長（学務担当））

14:30 ～ 15:10　講演「実験から得られる智慧」
北原和夫（国際基督教大学教養学部教授、理学科長）

15:10 ～ 15:25　休憩

15:25 ～ 15:55　講演「文系専門課程学生に対する自然科学教育カリキュラムの可能性
ー慶應義塾大学学生へのアンケート結果報告」
表　實（日吉キャンパス特色 **GP** 事業推進責任者・商学部教授）

15:55 ～ 16:50　パネルディスカッション
北原和夫、西井正弘、濱口　哲、表　　實、西村太良
河野正司（新潟大学 全学教育機構長 理事・副学長（教育担当））
朝吹亮二（日吉主任代表・法学部教授）

16:50 ～ 17:00　挨拶　　安西祐一郎（慶應義塾大学長）

慶應義塾大学日吉キャンパス特色 GP

「文系学生への実験を重視した自然科学教育」

第 2 回シンポジウム
「様々なカリキュラムの可能性」

日時／2007 年 11 月 22 日　水曜日　13：00 ～
場所／慶應義塾大学来往舎　シンポジウムスペース

はじめに

下村　本日は第 2 回シンポジウムの開催にあたり、北は東北、南は九州（佐賀）の遠方からも数多くの方にご参加いただき、誠に感謝申し上げます。

今回のシンポジウムの趣旨を一言述べさせていただきます。昨年度（平成 17 年度）、文科省の特色 GP（特色ある大学教育支援プログラム）に、私たちの「文系学生への実験を重視した自然科学教育」が採択されました。表實教授を責任者として活動をしてきており、2006 年 3 月に第 1 回シンポジウムを開きました。そのシンポジウムは、「今どんな教育が行われているのか」というサブタイトルでした。主に、慶應義塾大学内の文系学生に対する自然科学教育の歴史を見て、またその意義を再確認し、さらには学内の文系課程・専門課程の学生に対する自然科学教育カリキュラムが各学部でさまざまに展開されている現状を概観する、という目的で行われました。

受付にその報告書があったかと思いますが、今回の第 2 回シンポジウムは、前回を受けてもう少し視野を広げたいという思いが込められています。つまり、慶應以外の大学でさまざまな自然科学教育を実施されている方、あるいはもっと一般に、多様化する大学生を教育されている方にご講演いただき、よりよいカリキュラムの可能性を模索したいという趣旨です。

この GP における活動にはいくつか目標があるのですが、本シンポジウムに関連した活動としては、慶應義塾内でこれまでにないような、あるいは実際に学生の要望を踏まえた形で、新しいカリキュラムを開発するということが一応の目標になっております。そして、その目標に向けて、今回は外の状況も知るという趣旨で本シンポジウムを開かせていただきました。

本日はプログラムにありますように、京都大学の西井先生、新潟大学の濱口先生、国際基督教大学の北原先生、そして本塾の表先生にまずご講演いただき、その後パネルディスカッションを行いたいと思いますので、活発なご議論をお願いいたします。

ではまず、西村常任理事からごあいさつをいただきます。西村先生、よろしくお願いいたします。

西村　ただいまご紹介にあずかりました、大学ならびに学生教育を担当しております常任理事の西村と申します。いまの紹介にありましたように、平成 17 年度に日吉キャンパスの自然科学教育部門で「文系学生への実験を重視した自然科学教育」というテーマで特色 GP に採択されました。

慶應義塾大学日吉キャンパスと申しますのは、学部1～2年生を中心とした、いわゆる教養教育を行っているキャンパスです。一方で隣り合ったところにある矢上キャンパスには、理工学部がございます。その後できました湘南藤沢キャンパスでは、文理融合的な教育プログラムを展開しております。このような環境の中にあって、「実験を重視した自然科学教育」では、ある意味で非常に長い軌跡と経験の蓄積をもとに、この日吉キャンパスで、いわゆる教養教育論とか、文理融合教育といったものを考えてみようという趣旨でございます。

私自身は文学部に所属しており、「21世紀COEプログラム」の人文科学分野で、やはり実験的な手法を使って心の問題を扱う、分野横断的なプロジェクトを行ってきています。2006年度が最終年度で、現在そのまとめを行っているのですが、その経験から考えますと、いわゆる人文科学でも、従来の哲学や歴史、文学、美学といったカテゴリーには収まりきらないような研究テーマ、あるいは分野といったものが学生の問題意識の中に、かなり潜在的に存在しているというふうに思われます。大学院レベルでも、大学院後の段階においても、いわゆる文系あるいは理系というような単純な枠組み（事実上もちろんそれが厳然と存在しますが）ではなく、その融合・横断的なあり方が今後注目されてくるのではないかというふうに思います。

それは個々の学生の中にそういうことが起こっているということとは別にもうひとつ、現代社会における学問の捉え方として融合・横断的な視点で考えるという段階に来ているのではないかと思います。こういうことを申しますと、従来の伝統的な学問体系が悪いものなのかというような議論が必ず起こるわけですが、決してそれは矛盾しないと経験上理解しております。

学生の学問に対する要望、あるいは学生はこれからどういうことをやりたいのかということに関して、大学としてできるだけのことをしていきたいと考えています。今回のシンポジウムでもこの辺のところをご議論いただき、私も大いに参考にさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。（拍手）

下村　西村先生、ありがとうございました。それでは講演を始めましょう。まず最初に「京都大学総合人間学部『副専攻』制度の変遷」というタイトルで、西井正弘先生にご講演いただきます。西井先生、よろしくお願いいたします。